大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

肉体の喪失(下）：『ブデンブロオク家』の位置

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006545

肉体の喪失（下）

――『ブデンブロオク家』の位置――

伊藤嘉啓

（三）

第六部に入ります。ミュンヘンに行つてゐるトオニイから母へ手紙が来ました。ここでホップ商ペルマネエダア（Alois Permaneder）と知合になつたといふ報です。トオニイは出戻になつたことを気に病むでゐました。彼女自身のためにといふよりは、ブデンブロオク家のためにであります。

この頃、トムとクリスチアンとの間はよくなる所か、次第に悪くなつて行きます。クリスチアンの脚の痛は一向によくなりません。彼はクラブに出入し、「クリシアン」[46]（Krischan）とからかはれ、道化者扱されてゐます。トムは当然このやうな弟の態度を苦々しく思つてゐます。ある日、兄弟は口論になり、あはや絶交状態になる所でした。が、母の執成でその場はなんとか納りました。

ここでブデンブロオク家に対する世間の目をみて置きます。市長エーフェルデイク（Oeverdick）との姻戚関係は遠くなりました。トムたちの母の実家クレエガア家（Kröger）は、Konsul・クレエガアの死と息子のスキャンダルなどのために、今ではもう幅がきかなくなつてゐます。ゴットホルトは不釣合な結婚をしました。トオニイは出戻です。クリスチアンは市の笑種です。トムは焦らざるを得ません。そのやうな時、クリスチアンはクラブで „Eigentlich und bei Lichte besehen sei doch jeder Geschäftsmann ein Gauner ……“[47] と口走つて了ひました。ブデンブロオク家の競争相手ハアゲンシュトレエム（Hagenström）がかう応へます。„*Ich* meinerseits halte meinen Beruf *sehr* hoch.“[48]

クリスチアン個人が笑種になるのは、トムにはちつともかまひません。が、クリスチアンはブデンブロオク家の次男なのです。商会に迷惑が掛ることは、トムとして絶対に許せません。彼は弟を評し、„Du bist ein Auswuchs, eine ungesunde Stelle am Körper unserer Familie!“[49] と言ひます。

トオニイはミュンヘンから帰つて来ました。彼女は考へます。クリスチアンが一家の汚点であるやうに、自分も亦出戻娘となつて一族の恥となつてゐるのではないだらうか、と思ひます。

ペルマネエダアがブデンブロオク家を訪ねて来たのを汐に遊山が計画されました。行先で彼らはハアゲンシュトレエム家とメレンドルプ

家（Möllendorpf）の一行に出逢ひました。ユルヘン・メレンドルプ（Julchen）の側を通つた時にトオニイの気持は判然と決りました。子供の頃、彼女と喧嘩仲間だつたユルヘン・ハアゲンシュトレエムは、今ユルヘン・メレンドルプとなつてゐます。トオニイの決心は内心の声に従つてゐるのではなく、見栄のため、一家の汚点を消すためになされたのです。

トオニイとペルマネエダアとの結婚式はひつそりとしたものでした。持参金は父の遺言通り一万七千タアラアです。ペルマネエダアは彼女の持参金が入つたかと思ふと、直ぐに為事を止めて了ひました。トオニイの第一の思違です。それでも彼女は一八五九年の初に女の子を産み、希望が展けたかにみへます。が、この子も十五分後には冷たくなりました。彼女は母に訴へます。

„Ach, Mutter,……, was kommt auch alles auf mich herab! Erst Grünlich und der Bankerott und dann Permaneder als Privatier und dann das tote Kind. Womit habe ich soviel Unglück verdient?“[50] 理由は判ります。彼女の「よかれ」と思つてする決断が、実は彼女の不幸の種を蒔いてゐるのです。グリウンリヒ、破産、為事を止めて了つたペルマネエダア――これらはどれも禦がうと思へば禦げたものです。赤ん坊の死にしても、これら一連の不幸の結果とみられなくもありますまい。生れて来る子供の健康は、母親の肉体的精神的状態に強く左右されるからであります。

トオニイの不幸はまだつゞきます。一八五九年十一月、ベルリンから彼女が出した電報が届きました。„Erschreckt nicht. Komme umgehend mit Erika. Alles ist zu Ende. Eure unglückliche Antonie.“[51] ペルマネエダアと女中バベッテ（Babette）との間に不祥事件があつたのです。トオニイはトムに言ひます。„Ja, das bin ich und verstehe es gut, wenn Permaneder mich nie geliebt hat, denn ich bin alt und ein häßliches Weib, das mag sein, und Bábett ist sicherlich hübscher. Aber das enthob ihn nicht der Rücksicht, die er meiner Herkunft und meiner Erziehung und meinem Empfinden schuldete!“[52] トオニイにとつて、彼女のHerkunft や Erziehung の無視は、どうしても我慢出来ぬ侮辱であります。彼女は離婚を決心します。トムが注意します。„Tony, ……, du machst mir keinen Skandal!“[53] 彼は今は家長であり、何よりも体面を重ぜ「ねばならない」のです。トムとしては当然の配慮であり、忠告と言へませう。が、ブデンブロオク家のお嬢さん育のトオニイには、夫の悪戯を許すだけの度量はありません。それに何しろ、彼女への侮辱は彼女の氏素姓（Herkunft）への侮辱に等しいのであります。トオニイの決心も亦無理からぬものと言へます。

彼女を離婚に踏切らせた理由は、たゞ夫と女中との事件だけではありません。先づ、ミュンヘンといふ都市が彼女の気に入らないのです。ブデンブロオク家の娘といつても全く尊敬されない市・ミュンヘンです。さういふ市は彼女にはどうしても耐へられません。次に、為事を止めて了つたペルマネエダアに対する不満です。第三に、赤ん坊の死です。確かに悪いことが重りました。併し、不幸が重るのは、トオニイ個人だけではありません。ブデンブロオク家にとつても面白からぬ事件がつゞきます。ハンブルクに行つてゐるクリスチアンが、アリイネ・プフォゲル（Aline Puvogel）といふ子持女と関係してゐるといふのです。

第七部です。一八六一年俟ちに俟つたトムの長男が誕生しました。ハノオ（Hanno）です。彼の特徴はかうなつてゐます。„In diesen Augen, deren obere Lider sehr lange Wimpern haben, ist das Hellblau der väterlichen und das Braun der mütterlichen Iris zu einem lichten, unbestimmten, nach der Beleuchtung

wechselnden Goldbraun geworden; die Winkel aber zu beiden Seiten der Nasenwurzel sind tief und liegen in bläulichem Schatten.“[54] この痣のやうな「蒼つぽい影」は、ゲルタと一緒にブデンブロオク家に入込むで来たものです。それは不吉な印ではないまでも、何かしら暗い印象を与へます。

洗礼式にはクラアラ夫妻も出席し、クリスチアンもハンブルクからやつて来ました。彼は今そこでブルメエスタア商会（H. C. F. Burmeester & Comp.）の店主になつてゐるのです。式の済むだ夜、彼は兄に体の苦痛と商会の困難を訴へます。五千タアラアだけ遺産相続の前借を希ひます。その金でハンブルクの為事を清算し、ロンドンへ渡つて職に付きたいと言ひます。トムは冷やかにロンドン行の許可を与へました。

一八六二年はブデンブロオク家にとつて忘れられない年であります。Senator・メレンドルプが亡くなつたのです。新に Senator が選ばれます。ヘルマン・ハアゲンシュトレエム（Hermann）かトオマス・ブデンブロオクかであらうといふ市の噂です。二月の末に選挙が行はれ、トオマス・ブデンブロオクが当選しました。誰よりも喜んで、有頂天になつたのは（当のトムではなく）トオニイです。確かにこれはブデンブロオク家にとつて名誉に違ありません。最近何かと不如意な出来事が連続しましたが、久振の快事といへませう。

一八六三年の夏、トムは新しい家を建てる計画をします。何故彼は邸宅の新築などゝいふことを考へたのでせう。„Wer glücklich ist, bleibt am Platze. Seine Rastlosigkeit trieb ihn dazu, ……“[55] と作者は説明します。恐らくトムは何か正体の判らない物に逐回はされ、ぢつと落着いてゐられなかつたのです。トルコには „Wenn das Haus fertig ist, so kommt der Tod.“[56] といふ諺があります。トオマスの Senator 当選と（フイシアグルウベの）邸宅の新築は、謂はば最後の打上花火のやうなものでした。夜空に一瞬美しく繰広げられた絵巻だつたのです。その後には一層暗い闇が待つてゐました。ブデンブロオク家の没落は一段と速度を増して行きます。

一八六四年の七月、トオニイがクラアラからの手紙を持つてトムを訪ねて来ました。クラアラは脳結核に冒され、恢復は不可能だといふのです。クリスチアンは脚の痛が昂じ、ロンドンからの帰途、ハンブルクで入院しました。病名は関節リウマチスです。トムは妹に言ひます。„〉Senator〈 und Haus sind Äußerlichkeiten, und ich weiß etwas, woran du noch nicht gedacht hast,…… Ich weiß, daß oft die äußeren, sichtbarlichen und greifbaren Zeichen und Symbole des Glückes und Aufstieges erst erscheinen, wenn in Wahrheit alles schon wiedar abwärts geht.“[57] 彼はこのやうに一家の没落を予感し、分析は出来ますが、それを食止めることは出来ません。予感し、分析出来るからこそ、立直せないとも言へるのです。

八月、トムと母親との間に口論が興りました。原因はかうです。クラアラは矢張り恢復しませんでした。彼女は母宛の最後の手紙に、自分の死後分前の財産は夫チブルチウスにやつて貰ひたいといふのです。母はその通りにしました。トムには何の相談もしません。その額十二万七千マルクです。が、トムを怒らせたのは、たゞ金額のみではありません。母が息子に何の相談もしなかつたのは、反対されると思つたからです。併し、トムからみれば、全く度外視されたのです。彼は取引の面でも、市政の面でも、近頃思ふに任せません。それどころか、今度は家の者からも無視されたのです。理由はどうあれ、結果はさうなりました。

トオニイとクリスチアンはそれ〴〵八万マルクを失くしました。家の新築には約十万マルクかゝりました。ブデンブロオク家の経済状態

は段々思はしくなくなつて行きます。更にまた四代目のブデンブロオクとなる可きハノオはとかく病気がちです。ハノオの洗礼式の日に、トオニイは „Wir Buddenbrooks pfeifen noch nicht aus dem letzten Loch, Gott sei Dank,…… jetzt ist mir, als ob noch einmal eine ganz neue Zeit kommen muß!“[58] と喜びました。が、世の中はなか〳〵彼女の期待通りにはなつてくれません。それ所か、どうも裏目々々と出るやうです。

一八六六年の普墺戦争はブデンブロオク家の味方するプロシア側の勝利に終りました。が、休戦の直前にオウストリア側に付いたフランクフルトの大商社がブデンブロオク商会への支払を停止したのです。またも約二万タアラアの金額を、ヨハン・ブデンブロオク商会は失ひました。

前にも述べました通り、この小説で取扱つてゐる没落は、soziologisch, politisch なものではなく、人間の心の問題なのです。[59] 普墺戦争は商会に金銭の損失を齎したが故に、ここに登場してくるのです。

第八部です。一八六七年一月になりました。市立火災保険会社支配人（もう四十歳に近い）フウゴオ・ワインシエンク（Hugo Weinschenk）が（二十歳の）エリカに求婚して来ました。彼の年収は一万二千マルクです。ここでも問題となるのは（トオニイの結婚の場合同様）人柄よりは収入です。この結婚を一番喜んだのは（エリカでなく）母親トオニイでした。まるで彼女の三度目の結婚のやうであります。前の第七部も、ハノオの誕生、トムの Senator 当選といふ明るい報告から始りましたが、後半はあまり芳しい報もなくなりました。この第八部もエリカとワインシエンクの結婚から始りますが、その先はどのやうに展開して行くのでせうか。

一八六八年の春です。トオニイがペッペンラアデの友だちの所から還つて来ました。そこのラルフ・フオン・マイボオム（Ralf von Maiboom）はいま逼迫してゐます。どうしても早急に三万マルク必要なのです。フオン・マイボオムは妻のアルムガルト（Armgard）がトオニイと友だちなのに気付きました。トオニイの兄は勿論トオマス・ブデンブロオクです。つまり、彼はトムと立毛(auf dem Halm)取引したいといふ肚なのです。トオニイはこれを雙方の利益と考へ、トムにすゝめます。確かにこれはブデンブロオク家の数々の損失を一気に取戻すことが出来る商売です。トムはさういふ他人の弱身に付込むやうな取引は出来ないと言ひます。トオニイは決してそんな心配は要らないと言張ります。フオン・マイボオムが窃かにそれを望むでゐるといふのです。トムはこれ以上そのことで自分を苛々させてくれるな、と妹を叱ります。トオニイが応へます。„Denn ein so dummes Weib ich bin, das weiß ich aus mir selbst und von anderen Leuten, daß man im Leben über einen Vorschlag nur dann erregt und böse wird, wenn man sich in seinem Widerstande nicht ganz sicher fühlt und innerlich sehr versucht ist, darauf einzugehen.“[60]

トオニイが去つた後、トオマスは独り部屋に残り、考に耽ります。独りになると、緊張が緩み、老が目立ちます。世間に於て彼の評価が下つたかといふと、決してさうではありません。が、„… hatte doch die Vorstellung, sein Glück und Erfolg sei dahin, diese Vorstellung, die mehr eine innere Wahrheit war, als daß sie auf äußere Tatsachen gegründet gewesen wäre, ihn in einen Zustand so argwöhnischer Verzagtheit versetzt,……“[61] のです。どうしても決心が付きかねます。

彼は妹の親切に „Unreinliche Manipulation… Im trüben fischen… Brutale Ausbeutung… Einen Wehrlosen übers Ohr hauen… Wucherprofit…“[62] などゝいふ言葉で反対しました。ヘル

マン・ハアゲンシュトレエムならば、かういふ危惧に悩むだりはしないでありませう。 „War Thomas Buddenbrook ein Geschäftsmann, ein Mann der unbefangenen Tat—oder ein skrupulöser Nachdenker?“[63] と彼は自問してみます。結局、自分は両方の混血(Gemisch)であると結論します。混血——それはいゝ意味では二つの長所を一身に兼備へます。が、悪い意味にとれば、一方に徹し切れずに、宙吊りになつてゐるどつち付かずの状態です。

トムはある古い事件を想出します。彼は弟クリスチアンの放言に腹を立てました。[64] が、さつきのトオニイの論法をもつてすれば、腹を立てるのは、心の何所かでトムも（クリスチアン同様に）さう考へてゐる証拠なのです。彼が弟に腹を立てたのは、既に自分が実業家になり切れない人間であるのに内心気付いてゐるからです。クリスチアンの言動の中に自分自身を認めない訳には行かないからです。これ迄は、強い意志の力が何とかトムの中のクリスチアン的要素を押へて来ましたが、四十二歳の彼はもう疲れ切つて了つたのです。

„Auch Unglück,…, hat seine Zeit.“[65] と彼は考へ、つひに実業家として一世一代の決心をします。併し、この命題は „Auch Glück hat seine Zeit“ とも言換へられるでせう。一家の繁栄と最近の度重る不運とのどちらに視点を置くかで意味が全く違つて来ます。が、トムとしては „Auch Unglück……“ と「考へたい」のは当然です。フォン・マイボオムと立毛で取引しよう、と彼は決心します。一八六八年五月二十六日の夜でありました。

故意か、偶然か、トムはブデンブロオク商会の百年記念日を忘れる所でした。彼からすれば、もつと好しい状態で記念日を迎へたかつたのです。商会は一七六八年七月七日に出来ましたから、一八六八年七月七日が創立百年目に当ります。トムはトオニイに注意されて気付いたのです。

それはとにかく、七月七日には方々からお祝が寄せられました。ブデンブロオク家の幼い四代目ハノオも一役買つて、父親の前で詩の朗読をしましたが、うまく行かずに途中で泣出して了ひました。トムは不機嫌になります。この日にはもうひとつ書いて置かねばならぬ事件がありました。祝賀会の最中に、事務所の見習が電報を持つて来ました。[66] トムはちよつと座をはずし、それを読みます。„Es ist gut“ と彼は言ひ、更に同じ言葉を繰返します。ペッペンラアデの（フォン・マイボオムとの）取引に先手があつたのです。トムは心の何所かで、かうなるのを望むでゐたやうです。併し、彼の一世一代の決断が、かう軽く往されるとは何といふ運命の皮肉でありませう。

ブデンブロオク家の四代目ハノオは、どうも父親が希望するやうには育つてくれません。生来虚弱なこの少年は、（母譲りの）音楽によつて全くゲルダのものなのです。トムはつまりは高尚な趣味から、ゲルダの frendartig と共に彼女の音楽をも好しいものと思つてゐました。一方、彼は——と、言ふよりも、一般にブデンブロオク家の人々は（実務家肌でありますから）あまり音楽的素質があるとは言へません。祖父はフルウトを楽しみましたし、トムもメロディにまるで興味がない訳ではありません。が、ゲルダに言はせると、それは「全く音楽的価値のないもの」(Ein Ding so ganz ohne musikalischen Wert)[67] なのです。 „Er stand vor einem Tempel, von dessen Schwelle Gerda ihn mit unnachsichtiger Gebärde verwies… und kummervoll sah er, wie sie mit dem Kinde darin verschwand.“[68] 跡継のハノオをトムから、「音楽」が奪つて了つたのです。父親には息子の過敏な神経と空想癖とが気に入らず、息子には父親の不機嫌が理解出来ないのです。

恐らく、音楽は芸術の中でも一番放散的であり、聴く人に日常生活を忘れさせ、空想の世界へと誘込みます。ハノオは音楽に捧げられた

少年であり、既に「行為への意志」(Wille zur Tat) が欲けてゐるのです。音楽を Geist に、「行為への意志」を Wille zum Leben と言換へてみれば一層判然するかもしれません。このやうな少年がブデンブロオク家に現れた理由は、言ふまでもなくトムとゲルダとの結婚に由つてゐます。トムの洗練された感覚と世間体を重ずる態度が、（アンナを捨て）ゲルダを選むだのです。それらはいづれも祖先の努力による一家の繁栄に由来してゐるのですから、要するにハノオの誕生は必然の結果と言へませう。音楽はブデンブロオク家の没落を促進する重要な要素になつてゐます。

ハノオはある日家系簿を捲つてゐたかと思ふと、（自分の誕生日の）一八六一年四月十五日の次に斜線を引きました。これで終といふ印です。結末への予感――ハノオの夭折への暗示であります。

一八六九年の暮に、またしてもブデンブロオク家にとつて忌々しい事件が興りました。フウゴオ・ワインシエンクが詐欺罪に問はれたのです。担当検事は（ヘルマンの弟）モオリッツ・ハアゲンシュトレエム (Moritz) です。これがあのトオニイの「三度目の結婚」の結果でした。この年のクリスマスにメング通りの家に集つた人々をみますと、老人が多くなつてゐます。若いのは、エリカとその子エリザベト (Elisabeth) それにハノオの三人しか居りません。かうして老ブデンブロオク家は年を越します。

一八七〇年一月、ハアゲンシュトレエム検事は、直ちに勾留か、二万五千マルクの保釈金かの提案をしました。懲役三年半の判決が下されたのは、一週間後のことであります。

第九部は Konsul 老夫人の肺炎と死亡から始ります。棺が置いてある隣の部屋には、トム、ゲルダ、トオニイそれにクリスチアンが集り遺産分配を話合ひます。この席でクリスチアンは（子持女）アリイネと結婚する意志を明かにします。そのために兄弟の間に衝突が興りました。当然、興るべくして興つた破裂です。クリスチアンは兄の冷たさを非難し、兄はそれに応へて言ひます。 „Ich bin geworden, wie ich bin,…, weil ich nicht werden wollte wie du. Wenn ich dich innerlich gemieden habe, so geschah es, weil ich mich vor dir hüten muß, weil dein Sein und Wesen eine Gefahr für mich ist…"(69)

さうです。トオマスが弟を回避し、冷淡な態度に出たのは、自分自身を護らねばならなかつたからです。彼の中にもクリスチアン的要素はひつそりと潜むでゐたのです。クリスチアン的要素とは一体何でせうか。ひとことで言へば、それは非市民的傾向であります。これはブデンブロオク家の富が趣味の洗練を齎し、その当然の結果として生れて来たものといへませう。この傾向は兄弟共に備へてゐるのですが、クリスチアンは次男といふ気易さも手伝つて、（甘えて稍々誇張的に）表に現してゐるのです。

クリスチアンは子供の時分から他人の直似をして皆を笑はせるのが好きでした。長じてからは、芝居やオペラに血道を挙げますが、所詮一人前の芸術家になるだけの才能は持合せてゐません。また、ならうとする意志もありません。彼は市民からも、芸術家からも食出した自堕落なやくざ者の役しか演じられないのです。

一方、トムは身嗜にあまりにも気を使ひすぎます。普通の市民としてはどうかと思へる程です。が、これくらゐはまだいゝのです。もつと注意して置かねばならぬことがあります。他でもありません、彼はゲルダを妻に選びました。彼女は音楽と同様に最後までトムには何か「未知のもの」(etwas Fremdes) を内部に隠してゐます。が、それがまたトムには魅力でもあるのです。二人の間の一人息子ハノオは、（最早二人の子供とはいへず）音楽といふ絆によりすつかり母親だけのものになつて了つてゐます。かうみて来ますと、トムはブデンブロ

オク家の非市民化に大きな役割を演じてゐることが判ります。クリスチアンなどは脇役に過ぎませんが、トムはここでも主役を演じてゐるのです。たゞ彼は強い意志の力によつて、この病巣を必死に覆隠くしてゐるのです。それは他人に対してだけではありません。自分自身に対してもさうしてゐるのです。このやうな自己克服型の人間は、小男のフリイデマンや『トリスタン』のシュピネルに連ります。当然、これには絶えざる意志の緊張が必要です。いつも張りつめてゐる弦が切れ易いやうに、トムも何日かは疲れて了ふに異ひありません。

これまでトムはメング通りとフイシアグルウベとに二つの邸宅を持つてゐましたが、メング通りの方を売りに出す決心をします。いくらかでも出費を少くしようといふ心算(つもり)です。彼は仲買のゴッシュ（Sigismund Gosch）と八万七千マルクで売買契約を結びました。所が何と、この家を買取つたのが、ヘルマン・ハアゲンシュトレエムだつたのです。一八七二年早々にブデンブロオク家はメング通りの家から家具を移しました。

第十部です。ブデンブロオク家の四代目ハノオは不相変体が弱いのです。これはハアゲンシュトレエム家の二人の息子が筋肉隆々として、ハノオをいぢめるのと対蹠的です。父は何とか息子の虚弱な体質を改善しようと努力します。医者の忠告に従ひ、肝油も呑ませました。また、精神的にも鍛練しようと思ひ、他人を訪ねる時には息子を連れて行きました。が、そこでハノオがみたのは、父親の実業家としての異常なまでの努力――意志の緊張だつたのです。暫く跡絶(とだ)えてゐたトラアエミュンデへの避暑も、ハノオの健康のために復活されます。併し、そこでも亦海は小さなハノオを益々空想的にしただけでした。„… dieses mühe- und schmerzlose Schweifen und Sichverlieren der Augen über die grüne und blaue Unendlichkeit hin, von welcher, frei und ohne Hindernis, mit sanftem Sausen ein starker, frisch, wild und herrlich duftender Hauch daherkam, der die Ohren umhüllte und einen angenehmen Schwindel hervorrief, eine gedämpfte Betäubung, in der das Bewußtsein von Zeit und Raum und allem Begrenzten still selig unterging…“[70] 海は果てしもなく広く、波の繰返は永遠につゞくかと思へます。人々は海を見てゐると、（音楽を聴いてゐる時のやうに）日常生活を忘れて、夢見心地の陶酔に浸ります。ハノオのやうな少年には尚更です。トムにはいづれも全くの期待外れに終りました。

最近トムはめつきり老けて来たのに反して、ゲルダは十八年前に結婚した頃と殆ど変りません。„Diese Frau, deren Wesen so kühl, so eingezogen, verschlossen, reserviert und ablehnend war, und die nur an ihre Musik ein wenig Ledenswärme zu verausgaben schien, erregte unbestimmte Verdächte.“[71] 繰返しますが、彼女のこの為人(ひとがら)が初(はじめ)トムには魅力だつたのを忘れてはなりません。彼女は近頃フオン・トロタ少尉（René Maria von Throta）と懇(ねんごろ)になり、一緒に合奏してゐます。今やトムは家庭内でも孤独を感ずるやうになりました。妻は打解けず、音楽といふ（トムには）不可解なもので一人息子までも独占し、（少なくとも芸術の面では）夫を軽蔑して、他所(よそ)の男性と合奏を楽しむでゐます。トムと悩みを共にしてくれる者は誰もゐないのです。わづかにトオニイ一人は数へてもいゝかもしれません。が、彼女は何時迄もよくいへば無邪気、もう少し酷な言葉を使へば未成熟なのです。彼女は今でもブデンブロオク家の過去の幻影を追ひ、降懸る災難を、単に偶然の不運とのみみてゐます。ヒルシアは „Zu Schwester Tony spricht er meistens wie zu einer Echowand.“[72] と書いてゐます。トオニイとの対話は自分の一面との自問自答のやうなものです。

一八七四年の盛夏です。トムは亭の籐椅子に坐り、四時間も読書に

耽つてゐました。彼と悩みを分ち合ふ生きた人間はゐません。が、書物といふ形で、彼は共感者を発見しました。ショオペンハウアです。『意志と表象としての世界』(Die Welt als Wille und Vorstellung) の第二巻第四十一章「死及び死と人間本質の不滅性との関係について」(Über den Tod und sein Verhältnis zur Unzerstörbakeit unseres Wesens an sich) であります。それは読書といふよりは陶酔と名づける方が一層適切な体験でした。これは作者トオマス・マンの体験でもありました。[73] この哲学上の不朽の名作を書いた頃のショオペンハウアが三十歳であり、読むだマンが二十代なら、さういふ読書も素直に首肯けます。併し、私たちのトオマス・ブデンブロオクはもう四十過の初老男です。もう少し認識的読み方が相応しかつたのではないでせうか。

„Ich werde leben!“[74] とトムは囁いてみます。私たちが死んでも、私たちは子孫の中に生きつゞけるのです。死は現象だけの問題であつて、本質は不滅なのです。„Was war der Tod?…… Er war die Rückkunft von einem unsäglich peinlichen Irrgang, die Korrektur eines schweren Fehlers, die Befreiung von den widrigsten Banden und Schranken—einen beklagenswerten Unglücksfall machte er wie gut.“[75] 彼はこの世界観をすつかり自分のものにしたいと思ひます。が、翌朝彼を待つてゐたのは、今までと変らぬ日常市民生活であります。永遠の問題はその儘にして、彼は自分に出来る日常的整理に取掛ります。遺書であります。

一八七五年——作者のトオマス・マンが生れた年です。その年の一月、トムは Senat を早退して歯医者へと急ぎます。医者は痛む歯を抜かうとしましたが、途中から折れて了ひました。根は次に抜くことにして、トムは家へ急ぎます。突然、彼は雪解の街路に倒れました。あれ程身嗜に気を配つてゐたトムが、泥だらけになつて息を引取つたのです。弱り目の者には、運命はかうも皮肉に出来てゐるものゝやうです。死亡通知を書き乍ら、トオニイは „Ich fasse es nicht.“ と言ひ、„Aber es ist ja nun alles aus!“[76] と泣きます。が、(過去だけにしがみついてゐる) トオニイには解らなくても、私たちには解ります。これは上昇が約束した下降であり、栄華の必然の末路なのです。

（ブデンブロオク家の）向う側にある花屋のお内儀さん、——もう今ではイエルゼン (Iwersen) のお内儀さんとなつたアンナは、忙しく幾度も花を届けねばなりませんでした。一度、彼女はちよつとだけ上らして貰つて、トオマスの棺の前にすゝみます。この時も彼女は何度目かの妊娠で蒼白い顔をしてゐます。„Ja……“[77] と彼女は微かに啜上げ、直ぐ後を向きます。アンナは（ゲルダとは違ひ）いつも妊娠してゐるのではないかと思へる程に、沢山の健康な子供を産みました。トオマスが彼女を結婚相手に選むでゐたなら……といふ仮定は、全く無駄といへます。何故なら、アンナかゲルダかなどといふ二者択一は、トムの心の中に興る筈がありません。トムにしても、トオニイにしても、クラアラにしても、エリカにしても、それ〴〵に選むだ相手は賢明な熟慮の末に決定したのです。それ以外にはあり得ない必然の成行なのです。

トオマス・ブデンブロオクの葬儀は大変盛大でありました。

第十一部、長い小説も漸く最後の部に入ります。第一章、クリスチアンは兄の死後一年もたゝないうちにミュンヘンに行き子持女のアリイネと結婚します。残されたゲルダとハノオには（トムの友人）キステンマアカア (Stephan Kistenmaker) が遺言執行人・財産管理人・兼（ハノオの）後見人といふ役目に付きます。商会は遺言に依り一年以内に閉鎖と決りました。このことを誰よりも悲しむだのは他でもないトオニイです。彼女はハノオのために悲しみます。いや、長い伝

統ある商会のための悲しみが、その相続者・幼いハノオのためといふ形になるのでせう。トムの指示は賢明です。ハノオには到底ブデンブロオク商会を経営して行くだけの器量がありません。トオニイには残念至極かもしれませんが致方ありません。邸宅もゲルダは売りに出します。仲買のゴッシュは八万五千マルクの値を付けましたが、キステンマアカアがもつと高く売れると言ひます。が、結局は七万五千マルクで或独身者に売渡します。一八七六年の秋、ゲルダは郊外に別荘を買ひ、そこへ移ります。女中のイーダ・ユングマン（Ida Jungmann）は四十年もの長い間ブデンブロオク家に仕へて来ましたが、ゲルダとの折合が悪く西プロシアの故郷へ還ります。

第二章はハノオのある一日が詳細に物語られます。忘れてはなりません。私たちが読みすゝめてゐる小説は、ブデンブロオク家の四代の物語なのです。漸く四代目ハノオの時代になりました。小さなハノオは、今ではもう「小さく」はありません。背丈も伸び、彼はもう十五歳になつてゐます。が、この虚弱で、夢想的少年には、父や祖父たちのやうに確固とした一世代を形成するだけの能力が備つてゐないのです。父トオマスはそのことを誰よりもよく承知してゐましたから、商会の閉鎖を遺言したのです。ハノオのやうな鋭敏な神経の持主には、この世はあまりにも棘が多過ぎます。„Hanno leidet an allem, was ihm begegnet. Die Welt ist für ihn, den Träumer, ein einziger Ort des Schreckens und der Qual,…"[78] 彼は幼くしてこの世を去る運命にあります。

人間の一生とは、若死しやうと長生しやうとそれ〴〵に完結してゐるやうにみえるものゝやうです。もしさうならば、夭折する者はそれだけ一日々々を内容豊かなものとして過してゐるといへませう。ハノオの一日を私たちは他の人の五年か十年分の時間を掛けて読むでもいい訳です。

ここで先づ私たちはハノオと一緒に眠い目を擦つて起きます。彼と共に学校へ行き、今にも教師から当てられるのではないかと一緒に怖気付き、あるひは免れて吻と安堵の胸を撫下します。ハノオと一日同席すれば、厭でも彼の無気力を知らされます。腕白者の友だちカイ（Kai Mölln）との対比として、まざ〴〵とみせつけられます。„Ich kann nichts werden. Ich fürchte mich vor dem Ganzen…"[79] とハノオは言ひます。カイが励げまして、ハノオの音楽に触れます。さうでした、ハノオには音楽といふものがあつた筈です。併し、趣味としてならばとにかく、音楽を――一般に芸術を職業として世を渡つて行くのは並大抵ではありません。芸術家になるためには、才能と健康……に恵まれ、それにも増して、創造への逞しい意志が必要です。到底ハノオには無理といふものです。叔父クリスチアンは（体の）何所かに病気があるのを自慢してゐるかにみえ、他人（ひと）の真似をしては周囲（まはり）の者を笑はせました。彼は世間の物笑の種になることにより世間と繋がり、何とか生延びて来たのです。が、この幼いハノオは最早叔父程の社会性も備へてはゐません。トオマス・マンは „Mein eigentliches Erlebnis nun aber, das mich in den Stand setzte, der Literatur ein für die Geschichte des deutschen Bürgertums charakteristisches Werk zu geben, war die >Entartung< einer solchen alten und echten Bürgerlichkeit ins Subjektiv-Künstlerische: ein Erlebnis und Problem der Überfeinerung und Entrüchtigung, ……"[80] と書き、更にかうつゞけてゐます。„Was ich erlebte und gestaltete…, das war *auch* ein Entwicklung und Modernisierung des Bürgers, aber nicht seine Entwicklung zum Bourgeois, sondern Entwicklng zum *Künstler*, –"[81] が、「芸術家」に発展したのはブデンブロオク家ではなく、マン家であります。ハノオではなく、トオマス・マン自身なのです。単に感覚の洗練だけでは芸術家になれ

ません。そのためにはMoralが必要です。„Die Moral des Künstlers ist Sammlung, sie ist die Kraft zur egoistishen Konzentration, der Entschluß zur Form, Gestalt, Begrenzung, Körperlichkeit, zur Absage an die Freiheit, die Unentlichkeit, an das Schlummern und Weben im unbegrenzten Reich der Empfindung,… Moral ist ohne Zweifel die höchste Angelegeheit des Lebens, sie ist vielleicht der Wille zum Leben selbst.“[82] マンには空想癖と同時に強い Moral がありましたが、ハノオは Leben にはちっとも関心を示さず、唯うつとりと夢みるだけなのです。私たちのハノオは、「主観的・芸術的なものへの変容」をより明確にするために作者よりはより一層純粋な形で、夭折しなくてはなりません。

第三章はチフスの病状が一般論として述べられます。ハノオといふ名前さへ登場せず、具体的様子も描かれてはゐません。チフスに罹つた者全部が死ぬ訳ではありません。ある患者は助かり、ある患者は死ぬのです。その分れ目は何所にあるのでせう。単純に体力と言つて了へばそれ切ですが、それではあまりにも sachlich 過ぎます。もう少し metaphysisch に心の問題として考へてみます。体力といふ形而下的ものも、見方を換へると精神の反映に他なりますまい。さうすると生命力——生への意志ある者のみが、この重病から恢復出来るのです。仏教では生は死と共に五苦の中に入つてゐますが、ハノオには生は死よりも辛い苦しみなのです。ショオペンハウア流に考へると „Leben ist Leiden.“ であります。彼は親友のカイに „Ich möchte schlafen und nichts mehr wissen. Ich möchte sterben,…“[83] と言ひました。ハノオの死——それは何も運命の闇打ではなく、予め予期せられてゐたものゝ実現といへます。

第四章はゲルダが老父のゐるアムステルダムへ帰る送別の集りです。季節は秋、場所は郊外の質素な家であります。外では秋雨が音をたてゝゐます。集つてゐるのは、当のゲルダの他に、トオニイとエリカ、それにゴットホルト伯父の三人の娘たち……などです。女たちばかり——それも未亡人か、又は結婚出来ずに一生独身で通した者ばかりです。年も一番若いエリカで三十一歳、トオニイはもう五十になつてゐます。道具立は揃ひました。過去の華かな想出に耽ければ耽る程、現在の惨めさが身に泌みます。第一部の饗宴と対比してみる時、見事な終末といへます。

（四）

『ブデンブロオク家』の位置を考へること——それがこの報告の狙であります。結論に入る前に言添へて置かねばなりません。この「位置」といふ言葉は二重の意味を荷つてゐるのです。つまり、トオマス・マンの作品群に於ける『ブデンブロオク家』の位置と文学史上に於ける（この小説の）位置であります。

〔トオマス・マンの作品群に於ける位置〕先づ、マンの数多い作品の中で占める位置からみてゆきませう。六十五年の永い作家生活のうちに、彼は（評論を除いても）八つの長篇とその他に短篇・中篇・戯曲合せて三十四篇を生産しました。実に尨大な量といへます。これらの作品群の中で、一体『ブデンブロオク家』はいかなる位置にあるのでせうか。一言でいへば、この作品に依り作者マンは一廉の作家として自立したのです。マンは後年 „…, daß ein großer Dichter vor allem groß—und erst dann ein Dichter ist.“[84] と言ひました。この長篇の完成によって、彼は一廉の芸術家として、いや、それよりも先づ一廉の人間としての自信を獲得したのです。„Mit dem Erscheinen von *Buddenbrooks* trat Thomas Mann als reifer Künstler vor die Öffentlichkeit. Eine im Innern belastete und

problematische, in ihren produktiven Äußerungen gebändigte Jugendzeit war abgeschlossen.[85]" と言へるでせう。

名門マン家の御曹子は、一家が没落したればこそ尚更一層「一廉の者」にならねば世間に対しても、自分に対しても顔向けが出来ません。が、トオマス少年は学校にも馴染めず、[86]未だ自分の才能も発見出来ぬ儘のらくらと日を過します。 „Einsam-unregelmäßige, welt- und todsüchtige Jugend[87]" と彼は当時の様子を書いてゐます。所が、このやくざ者はここに判然と自分の進む可き道をみいだしたのです。もうやくざ者ではありません。一人前の作家、一人前の人間に成長したのです。青春の（前途への）不安・焦躁・憂鬱は消えました。以後、彼は迷はず一筋の道を粘強く追求して行くのです。

よかれ悪かれ、作家は処女作によつて規定されるといはれます。マンは『ブデンブロオク家』以前にも幾つかの短篇を書いてゐます。が、物事を鋭角的に捕へ、それを簡潔に表現する様式は、ドイツ的でもなく、マンに相応くもありません。忍耐強く辛棒して、植物のやうに徐々に成長し、つひには森林までになる方法が、彼の天分です。トオマス・マンの本領は短篇にあるのではなく、飽までも長篇にあるのです。その意味で、マンの真の処女作は他ならぬ『ブデンブロオク家』といへます。この作品には、長所も短所も彼の一切の特徴が要約されてゐるといつてもいゝかもしれません。 „Ich sinne darüber," と彼は書いてゐます。 „ob es nicht dies Buch sein mag unter all den meinen, dem bestimmt ist, zu bleiben. Vielleicht war damit meine 〉Sendung〈 erfüllt und es war nur noch mein Teil, ein nachfolgendes langes Leben leidlich würdig und interessant zu erfüllen. Ich will die Lebensentfaltung nach dem Jugendwurf, durch 〉Zauberberg〈, 〉Joseph〈, 〉Lotte〈, nicht undankbar verkleinern. Aber es könnte ein Fall sein wie mit dem 〉Freischütz〈,…" 前に（一）で）引いた「この作品で、私は以後の創作の足場となるやうな人間的芸術的な土台を作つた」[89]といふ言葉と合せ読めば、この作品の位置が明かになります。『ブデンブロオク家』はトオマス・マン芸術の最も重要な基石に当る訳です。[88]

西田哲学によりますと、世界は「作られたもの」から「作るもの」へと動いて行きます。『歴史哲学ニツイテ』から引用してみませう。「人間ノ生命ニ於テハ作ラレタモノガ単ニ物質的デナク、ソレ自身ノ精神ヲ有ツタモノデアツテ、逆ニ人間ヲ精神的ニ動カスノデゴザイマス。例ヘバ、古代人民ノ作ツタモノデモ、単ニ過去ノモノデハナク、ソレ自身ノ精神ヲ有シ、現在ニ於テモ我々ヲ動カスノデゴザイマス。又自分ノ作ツタモノモ他人ノ作ツタモノノ如ク自分ニ対シ、他人ノ作ツタモノデモ自分ノ作ツタモノノ如ク自分ニ対スルノデゴザイマス」[90]この因果関係は勿論作家と作品の場合にも当嵌ります。『ブデンブロオク家』はトオマス・マンによつて作られた芸術作品ではありますが、後にはこれが彼の芸術と人間を動かし、規定して行くのです。作者マンはこの作品を作り、この作品に動かされ以後の『魔の山』(Der Zauberberg) や『ヨセフと兄弟』(Joseph und seine Brüder) や『ファウスト博士』(Doktor Faustus) へと発展してゆきます。これがトオマス・マンと処女長篇『ブデンブロオク家』との関係及びその位置のあらましであります。

〔文学史上の位置〕次に文学史上の位置に移ります。この作品は出版当初モデル小説としても読者の興味を惹いたやうです。慥かに当時のリウベックの人々には、この小説の到る所に実在人物のカリカチュアを見出すのは容易だつたでせう。が、それから半世紀以上過つた現在、遠い東の日本の私たちには、自づから別の見方が出来る筈ですし、またさうしなくてはなりません。

『ブデンブロオク家』は「ある一家の没落」が主題となつてゐます。

没落の主題と言ひますと、直ぐに自然主義が頭に浮びますが、マンの取扱方はいさゝか違つてゐます。自然主義では没落は遺伝とか社会環境から soziologisch-politisch に捕へられます。これに対し、マンは没落を人間の生活力の減少として biologisch-metaphysisch に解釈してゐるのです。„Das Problem, das mir auf den Nägeln brannte und mich produktiv machte, war kein politisches, sondern ein biologisches, psychologisches;“[91] と作者は回想してゐます。トムの死にしてもさうなのです。彼の死は「外から」ではなく、「内から」の原因に基づいてゐます。大の男が、一本の歯のために命を落すなどゝいふことがあるでせうか。ここで一本の齲歯（むしば）はさして重要な要因ではないのです。たゞ切掛――事件の単なる糸口にさへなればいゝのです。„Zwar gelingt es ihm (Tom), der von jeher die Kunst, zu repräsentieren, verstanden hat, nach außen hin den Eindruck zu wahren, daß alles beim Alten sei, aber in der dazu gehörigen Schauspielerei erschöpft sich der letzte Rest von Lebensenergie, so daß er für den Tod wie dessen Lobredner Schopenhauer reif wird. Von dieser Seite her gesehen ist Thomas' Tod somit nicht die Folge von Überanstrengung eines durch Krankheit geschwächten Organismus, sondern Folge eines durch den Geist bewirkten Erlöschens seines Lebenswillens, seines Überdrusses am Ganzen.“[92] とヲルフは説明します。更に言へば、ブデンブロオク家の没落そのものが、外因ではなく、内因のせゐなのです。

ブデンブロオク家の物語が展開される四十年の間には、幾つかの大きな政治的事件が数へられます。（一八）四八年の諸革命、六六年の普墺戦争そして七〇年～七一年の普仏戦争などであります。これらの事件もブデンブロオク家の人々や親戚と直接関係がある面からしか取上げられてはゐません。例へば、六六年の戦争は商会に多額の損失を齎したが故に重大なのです。前の（註(91)の）引用につゞけて、作者は „und daß ich ihm als Künstler all meine Aufmerksamkeit zuwandte, das war wohl wiederum recht deutsch: das Seelisch-Menschliche ging mich an; das Soziologisch-Politische nahm ich eben nur halb unbewußt mit, es kümmerte mich wenig.“[93] と言つてゐます。時は十九世紀、場所はリウベック、内容は没落の metaphysisch な解釈といふ極めてドイツ的本が出来上りました。その意味で、この本は大変 local です。が、それでゐて而も没落の典型に迄なつてゐる所に、この小説の価値があるのです。

『ブデンブロオク家』は一八九七年から書始められ、一九〇〇年に完成しました。新世紀の第一年目に当ります。この数字的偶然にこの小説の文学史上の位置が象徴されてゐると私は考へます。つまり、『ブデンブロオク家』は十九世紀の小説と二十世紀の小説との中間にあるとみるのです。

勿論十九世紀から二十世紀に変つたのは、単に数字上の事柄に過ぎず、歴史の本質とは何ら係りがない筈です。が、明治文学とか大正文学といふ区分が、本質的でないにも拘ず、便宜上使用が許されるやうに、こゝでは十九世紀と二十世紀のそれを分けて考へただけです。単に十九世紀と言はずに、ルネサンスから十九世紀迄と二十世紀と言換へる方がいゝかもしれません。あるひは、もつと簡潔に近代と現代とすれば一層判然するでせう。私は近代と現代との変り目を仮に一九〇〇年と定めてみます。この年号は便宜的設定ですから、あまり深い意味は有つてゐません。大事なのは近代と現代を区分する考です。

ルネサンスに端を発し、産業革命を経て発展して来たヨオロッパの文明――即ち、近代文明は十九世紀に一つの完成に到達しました。私たちの生きてゐる現代は、ルネサンスに始る近代の単なる延長上にあ

るのではありません。近代がヨオロッパの世紀なら、現代は米露の世紀です。ヨオロッパの矮小化といふことが叫ばれて久しくなりますが、それは近代文明の矮小化と言換へて差支へありません。文学、美術、音楽などの所謂芸術も文明の一翼でありますから、近代芸術は近代文明と運命を共にせねばなりません。これら近代芸術もルネサンスに始り、十九世紀にある頂点に達したのです。それでは近代文明の特質はどう言ひ現せばいゝでせうか。ここでは簡単に「個人の自覚」と言つて置きます。近代は個性尊重の時代でありました。中世は人間が個人を押へて神への奉仕を強ひられた時代です。其所では人間は肉体を失ひ、痩せて平板化します。中世の絵画をみれば、その点納得がゆくと思ひます。中世の反動として興つた近代は、人々が現世の幸福を堅く信じ、人間の肉体に美を発見した時代です。ミケランジェロ(Michelangelo Buonarroti)の彫刻やラファエロ(Raffaello Santi)の絵画はその端的な現れ(あらは)です。バッハ(Sebastian Bach)に始る近代音楽の場合も、例へばベェトオヱン(Ludwig van Beethoven)の交響曲を思浮べれば解り易いでせう。「皇帝」「英雄」などいづれも人間中心——人間讃美の音楽ですし、「運命」は神の運命ではなく人間の運命です。

文学に於ても同様の点が指摘出来ます。ドン・キホオテ(Don Quijote)型の人間とかハムレット(Hamlet)型の人間とかいふ言葉があるやうに、セルバンテス(Miguel de Cervantes Saavedra)やシェクスピア(William Shakespeare)は人間の prototype を創造しました。ドン・キホオテやハムレットは鮮明な立体的形姿で今も私たちの目の前に立つてゐます。別の言ひ方をすれば、この時代は広い意味でのリアリズムの時代とも名づけることが出来ます。

翻つて、現代の芸術に目を向けてみませう。クウルベ(Gustave Courbet)の réalisme の次に来たのが印象主義です。勿論印象主義は local colour を否定して、現実そのものを描かうとする徹底リアリズムであります。が、その結果瞬間の印象しか信頼出来なくなり、構成の破壊といふ大きな犠牲を伴ひました。リアリズムの破産です。印象主義は近代絵画の没落であり、同時に現代絵画の誕生なのです。fauvisme を通り、cubisme に到つて、絵画は全く平面化して了ひます。平面の認識とその利用——それが cubisme の理論です。ルネサンスの美術と比較してみれば、肉体の喪失振がよく解ります。

かうした傾向は何も絵画のみにみられる特異現象ではありません。音楽には、シェンベルク(Arnold Schönberg)の十二音音楽(Zwölftonmusik)があります。私たちの日常生活では調(トナ)(Tonart)といふような解決は普通存在しません。その意味でシェンベルクの無調音楽も亦一種の徹底リアリズムといへなくもないでせう。

最後にいよ〳〵文学に入ります。ルネサンスに始つた近代文学は、フロベェル(Gustave Flaubert)やトルストイ(Lev Nikolaevich Tolstoj)のリアリズムで完成に到達したと言つていゝのです。次に待つてゐるものは何でせうか。ここでも徹底リアリズムと同時にリアリズムの破産がそれです。ジョイス(James Joyce)の『ユリシイズ』(Ulysses)、ジッド(André Gide)の『贋金づくり』(Les faux-monnayeurs)、プルウスト(Marcel Proust)の『失はれた時を求めて』(A la recherche du temps perdu)などが、一九二〇年前後から書かれます。「レアリスムの小説は、主人公を設定し、これを動かし、これに語らせ、一篇の物語を編」みます。[94] が、現実では事件はそのやうに発端、頂点、結末といふ形は、先づ採りません。一切はいろ〳〵の事件に発展する可能性は有つてゐますが、(リアリズム小説のやうに)明確な一筋の道をすゝんだりはしません。個性に就ても、セルバンテスやシェクスピアが創造したやうな人物が実在してゐる訳ではないのです。人間誰の中にもドン・キホオテ的要素とハム

レット的要素とが混ってゐるのです。だから、現実の世界には主人公も存在せず、結末もありません。判然した性格と輪廓の明かな肉体を有つた近代小説の主人公たちは姿を消しました。次に私たちがみてゐるのは、肉体を失くした人々が右往左往してゐる様子をさまゝの角度から映してゐる影絵芝居なのです。正に徹底リアリズムであります。が、あまりにも徹底を求めるあまり、部分にのみのめり込み、全体の展望を失つて了ひました。同時にリアリズムの破産を招いたのです。

宵にそればかりではありません。もう少し根源的意味で、現代小説は主人公不在の小説と言へるでせう。近代とは vor-industriell な Bürger 中心の時代であり、其所では Besitz と Bildung が同居してゐました。が、現代は違ひます。人々はそれぞれに細分化された専門に属さなくてはならないのです。強力な個人演技の時代は終りました。文学が時代の反映であるならば、近代文学は当然現代文学へ変つてゆかねばなりますまい。近代文学が近代文明の一部であるやうに、現代文明も亦それに相応しい文学を求めるからであります。現代に於て社会を動かして行くのは、ある個人ではなく、組織の力です。もはや現代に英雄（Held）は存在しませんから、現代小説にも主人公（Held）は登場出来ないのです。現代小説では主人公の行動を物語るのが目的ではなく、例へば不安といふやうな状況を描くために人物が登場して来るのです。

それでは、私たちが問題にしてゐる『ブデンブロオク家』に就て考へてみます。この小説の主人公は一体誰なのでせうか。トオマスでせうか。ハノオでせうか。いや、どちらも主人公とは言へません。私たちはトオマスの物語やハノオの物語を読むだのではありません。「ある一家の没落」を読むだのです。最早この二人には物語を引摺つてゆくだけの逞しい性格や肉体は備つてゐません。作者は彼らのために物語るのではなく、「ある一家の没落」を物語るために彼らを登場させて来るのです。「ある一家の没落」――それがこの小説の主人公なのです。その没落は soziologisch-politisch に外側から描かれてゐるのではなく、人間の心の問題として biologisch-metaphysisch に解釈されてゐます。こゝにこの小説の現代性があります。が、その描写法は伝統的な（近代の）リアリズムの手法に倣つてゐます。„Mein Vorurteil war, daß neben Joyce's exzentrischem Avantgardismus mein Werk wie flauer Traditionalismus wirken müsse.“[95] と作者も言つてゐます。要するに、『ブデンブロオク家』はトムが ein praktischer Mensch と ein zärtlicher Träumer との混血（Gemisch）であるやうに、[96] 近代小説と現代小説の混血といへます。

『ブデンブロオク家』は十九世紀のハンザ都市・リウベックを舞台に、「ある一家の没落」を描いてゐます。二十五歳の青年は家族に腹が捩れる程笑つて貰ふために、[97] 今は没落して了つた自家をモデルに小説を書きました。このやうに時間も場所も目的も個別的物語は、同時に超個別的性格を有してゐたのです。„Wie oft, etwa in der Schweiz, in Holland, in Dänemark, habe ich junge Leute ausrufen hören: »Dieser Prozeß der Entbürgerlichung, der biologischen Entrüchtigung durch Differenzierung, durch das Überhandnehmen der Sensibilität—genau wie bei uns!«“[98] とトオマス・マンは自讃してゐます。『ブデンブロオク家』は十九世紀ハンザ都市のある商会を描きながら、同時にドイツ市民気質一般、更にはヨオロッパ近代の市民をも描いてゐるのです。この小説が高く評価される所以であります。

カロッサ（Hans Carossa）は自分の幼年時代を素材にした作品に Meine Kindheit ではなく、Eine Kindhet といふ題名を付けました。カロッサの描いてゐるのは、彼の個別的幼年時代ではないので

す。幼年時代一般なのです。彼は（所有代名詞ではなく）不定冠詞でその意味を象徴してゐます。[99] 同様に、私たちが問題にしてゐる長篇小説は、Verfall *einer* Familie なのです。トオマス・マンは自家の没落に材を採りながら、一家の没落の普遍的形象化を試み、それに成功したのです。

もとより時代や場所の制限を受けぬ文明は存在しません。その意味ではあらゆる文明は特殊的だともいへます。が、単に特殊なものは、一時の流行とはなつても、偉れた価値あるものとは言へません。真に価値あるものは、特殊にして一般でなくてはならないのです。さういふものだけが永遠の価値を有つのです。一九四九年七十四歳の誕生日に、トオマス・マンは „Manche Leute freilich meinen, ich sei passé. Aber für ihr Alter von bald fünfzig Jahren sind die *Buddenbrooks* doch noch recht frisch…“[100] と言つたと伝へられます。執筆後七十年にならうとする（一九六九年の）今も猶、『ブデンブロオク家』は生きてゐます。特殊的にして一般的なものゝ形象化に成功してゐるからであります。今も世界の何所かでボヴァリ夫人（Madame Bovary）が泣いてゐるやうに、トムやハノオが人生に悩むでゐるのです。

（をはり）

〔註〕

（46） 多分 Krisch との誤詞であらう。
（47） Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 240.
（48） Edenda, S. 240.
（49） Ebenda, S. 242.
（50） Ebenda, S. 279.
（51） Ebenda, S. 280.
（52） Ebenda, S. 289.
（53） Ebenda, S. 289.
（54） Ebenda, S. 300.
（55） Ebenda, S. 318.
（56） Ebenda, S. 326.
（57） Ebenda, S. 326.
（58） Ebenda, S. 304 f.
（59） 例へば、註（91）に示してある引用参照。
Betrachtungen eines Unpolitischen (Politische Schriften und Reden 1) (Moderne Klassiker/Fischer Bücherei 1968) S. 104.
（60） Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 346.
（61） Ebenda, S. 354.
（62） Ebenda, S. 355.
（63） Ebenda, S. 356.
（64） 註（47）に示した引用参照。
（65） Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 355.
（66） Ebenda, S. 374.
（67） Ebenda, S. 386.
（68） Ebenda, S.386 f.
（69） Ebenda, S. 440.
（70） Ebenda, S. 479.
（71） Ebenda, S. 488 f.
（72） Eberhard Hilscher: Thomas Mann (Volk und Wissen) S. 16.
（73） „Einsam-unregelmäßige, welt- und todsüchtige Jugend—wie sie den Zaubertrank dieser Metaphysik schlürfte, deren tiefstes Wesen Erotik ist und in der ich die geistige Quelle der Tristan-Musik erkannte! So liest man nur einmal.“ とトオマス・マンは『非政治的人間の省察』に書いてゐる。
(Betrachtungen eines Unpolitischen—Politische Schriften und Reden 1 〉Fischer Bücherei〈—S. 53)
尚、同様のことが『略伝』の中にも書いてある。

(Lebensabriß—Autobiographischisches 〉Moderne Klassiker/ Fischer Bücherei 1968〈—S. 230)

(74) Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 498.

(75) Ebenda, S. 498.

(76) Ebenda, S. 522.

(77) Ebenda, S. 524.

(78) Theo Rosebrock : Erläuterungen zu Thomas Manns 〉Buddenbrooks〈 (C. Bange) S. 37.

(79) Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 564.

(80) Betrachtungen eines Unpolitischen (Politische Schtiften und Reden 1) (Fischer Bücherei) S. 103 f.

(81) Ebenda, S. 104.

(82) Süßer Schlaf (Autobiographisches) (Fischer Bücherei) S. 29 f.

(83) Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 565.

(84) Phantasie über Goethe (Schriften und Reden zur Literatur, Kunst und Philosophie 3) (Moderne Klassiker/Fischer Bücherei 1968) S. 63.

(85) Klaus Shröter : Thomas Mann (Rowohlt 1964) S. 62.

(86) Lebensabriß (Autobiographisches) (Fischer Bücherei) S. 221.

(87) Betrachtungen eines Unpolitischen (Politische Schriften und Reden 1) (Fischer Bücherei) S. 53.

(88) Die Entstehung des Doktor Faustus (Schriften und Reden zur Literatur, Kunst und Philosophie 3) (Fischer Bücherei) S. 122.

(89) 註（11）に示した引用参照。

(90) 歴史哲学ニツイテ（『「続 思索と体験」以後』）（西田幾多太郎全集第十二巻 岩波 昭和四十一年）二六九頁。

(91) Betachtungen eines Unpolitschen (Polische Schriften und Reden 1) (Fischer Bücherei) S. 104.

(92) Hans M. Wolff : Thomas Mann (Francke) S. 25.

(93) Betrachtungen eines Unpolitischen (Politische Schrifften und Reden 1) (Fischer Bücherei) S. 104.

(94) 三口薦「『贋金つくり』あとがき」（川口薦訳『贋金つくり』（下） 岩波 昭和三十八年）二三八頁。

(95) Die Entstehung des Doktor Faustus (Schriften und Reden zur Literatur, Kunst und Philosophie 3) (Fischer Bücherei) S. 133.

(96) Buddenbrooks (Fischer Bücherei) S. 356.

(97) Der Künstler und die Gesellschaft (Politische Schriften und Reden 3) (Moderne Klassiker/Fischer Bücherei 1968) S. 342.

(98) Lübeck als geistige Lebensform (Autobiographisches) (Fischer Bücherei) S. 183.

(99) モオパッサン (Guy de Maupassant) も亦女の一生を描いた作品に〉Une vie〈といふ題名を付けてゐる。彼は特定の女の一生ではなく人生一般を描かうとしたのである。

(100) Arnold Bauer : Thomas Mann (Colloquium 1962) S. 8.

（以上 44・11・30）